花暦八笑人全
滑稽合人全
誓和人全
妙林林話七偏人全

花曆八笑人

滑稽和合人

妙林林詁七偏人

全全全

大正四年二月廿五日印刷
大正四年二月廿八日發行

有朋堂文庫
八笑・和合人七偏人
（非賣品）

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區綿町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區綿町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

緒言

花暦八笑人、滑稽和合人、妙竹林話七偏人の三種を萃めて本集一卷を爲す。此三種は共に德川文學中、滑稽的中本の掉尾の代表作とも稱すべきもの也。

八笑人と和合人とは共に瀧亭鯉丈の作に係る。但八笑人の五編上は一筆斎主人、同中下の二卷は與鳳亭枝成の補作する所、又和合人四編上中下の三卷は爲永春水の補ふ所也。鯉丈は下谷稻荷町に住して通稱を八藏といひ、櫛小間物の細工又は三味線引等を本業とせりしものといふ。大山道中栗毛駿馬を著して一九に模倣し、浮世床三篇又は人間萬事噓計の後編を作りて三馬をも學びたれど、其特色の認むべきは元より本集收むる所の二編に在りて存せり。一九の膝栗毛と、三馬の浮世風呂浮世床と、而して鯉丈の此二篇とは、實に德川滑稽文學中の粹と稱すべく、その描く所の人物と事態と三者甚だしく相異るものあり、文に優劣の差ある事、又元より免かれざる所なりと雖も、而も其治平三百年の側面史たるに至りては卽ち一也。共に收めて本文庫中の二編をなせり。彼此相參看して我滑稽文學の妙

諦を窺ひ、擊壤鼓腹の太平樂を聞かば、讀者思はず破顔一笑すると共に、言ひ難き興味の津々として句々の間に湧起するの概あるを覺えん。

物之本江戸作者部類、鯉丈を評して曰く、

此作者は何がし町の謎箔屋なりとぞ。實名未だ詳ならず。近頃多く中本を作るに、評判春水にまされりといへり。七八年前なりけん、全本一卷(八笑人といふもの)借覽せしに、又例の茶番狂言に似たるものにて新奇の趣向はなかりき。其が中に浮薄人二名、飛鳥山にてかたき討のまねをして人を驚かさんと示し合せて往きたる折、お國侍、其を實事と思ひて助太刀せんと云ふに困じたる打渾場(ちやりば)ありしのみ覺えたり。かばかりの才子にだに匱しきは戲作者は今船間にやあらんすらむ。

といへり。中らずといへども遠からざる言と稱すべく、到底鯉丈は滑稽作者として一九三馬の下風に立つを甘んずべきもの、其滑稽の仕組は多く「茶番狂言」の圈外に逸する能はず、趣向窮しては强ひて看客の笑を招かんとする執拗の態度に出づるもの、亦往々にしてこれあるを見る。

七偏人十五卷は梅亭金鷲の作、安政四年の上梓に係るものにして、其筋亦先人の結構せる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

破綻失策滑稽地口の類を反覆せるに過ぎざれども、これ實に燭火の將に滅せんとして暫く煌々たる光輝を畢ぐるが如く、德川滑稽文學の最後を飾れりし一個の美華として、之を後昆に傳ふるの價値なしとせず。金鶯は明治の初年に最も有名なりし滑稽雜誌團々珍聞の主要なる記者として、明治文學の開析に亦一臂の力を致せる文人也。

以上三種共に流布の版本に基き、會話に鉤識を施し、往々假名を漢字に改め、假名遣送假名を統一したる外、原本插畫の若干を併せて覆刻し、原本の細書を割註と爲す等、努めて原本の面影を失はざらん事を期したり。

本書の校訂には椿弦祐氏の手を煩はしたる事最も多し。記して謝意を表す。

大正四年一月

校訂者　塚本哲三

目錄

花暦八笑人　一——二五六

春の部　壹之卷……五
春の部　二之卷……二〇
二編　上之卷……四四
二編　下之卷……六三
三編　上　冊（初編目次兩國川僧涼蓮池之會合）……八八
三編　下　冊（僧涼蓮池之會合其二）……一〇四
三編　追加上……一二三
三編　追加下……一三八
四編　上　卷……一五五
四編　下　卷……一七〇
四編　追加上之卷……一八九
四編　追加下之卷……二〇二
五編　卷之上……二二三
五編　卷之中……二三四
五編　卷之下……二四五

滑稽和合人　二五七——四四八

初編　上　卷……二六一
初編　中　卷……二七七
初編　下　卷……二九四
二編　上　卷……三一五
二編　下　卷……三三七
二編　追加上卷……三四一
二編　追加下卷……三五六
三編　卷之上……三七三
三編　卷之中……三八七
三編　卷之下……四〇三
四編　卷之上……四一九
四編　卷之中……四二九
四編　卷之下……四三九

妙竹林話

七偏人

初編卷之上……四五一
初編卷之中……四六四
初編卷之下……四七八
二編卷之上……四九五
二編卷之中……五一三
二編卷之下……五二六
三編卷之上……五四三
三編卷之中……五五五
三編卷之下……五六九
四編卷之上……五八五
四編卷之中……五九八
四編卷之下……六一一
五編卷之上……六二五
五編卷之中……六四〇
五編卷之下……六五三

花暦八笑人序

暦を披いて八將神を見るは、吉方を知つて萬事を行はんが爲なり。八笑人を開いて花暦をしるは、阿房を見て戯作に笑はんが爲なり。夫は恵方の年徳神、是は阿房の八笑人、恵方果報は寢て待つとも、ねにはかへらぬ花の下臥、まづひらきたる吸筒の、口に出るまゝ洒落を吐きたる花見の連の一群が、現ぬかして戯るゝさまを觀るが如くに書綴りしは、友人瀧亭鯉丈なり。そもそも根岸の里の根なしごとをとり出して、谷中の谷の底をも穿つ歟。瀧の川には瀧飲の盃を傾け、不忍の池には高聲の調子をも忍ばず。飛鳥の山に今日を忘れて、日暮の里に晩鐘を恨む。何がし山に昔をしのびては、道灌山吹破れた衣など、實のなき地口を囀るたぐひも、皆是酒に戯れ花にうかるゝ人心にして、實にも愛たき春の夕暮、櫻は花の王子の神社、此方に向ひて畜類のむだ口をもとめず。小便無用花の山、萬よし野も小初瀬も、此大江戸の華にはしかず。まだおほ江戸の花見の日記は、四季の名所の春にはしかずと、千社參りの豐丸正、矢立の筆を繼足して、櫻戸の端に記すことしかり。

琴通舍英賀

橋蔭丈

一杯堂

鳴保

琴通舎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

伊都茂麁文之滑稽　瀧亭鯉丈編

又改三年かのえたつ乃新編目録　嘉永加書　凡二冊五十九

大せいいけのたこ　仕入ものいて方ぐあり但こうくらづ

大そうだんうちの方　こぞうりょうこぞんざるる

大らんおやのあご　仕こうぶたらぶたらく

こしぐあとのるす　きん

たつこの方のこらずおス　全部

とけういぬる　きけごちたてさせず

たいこうのこと　むこうおいちらすさけのこちぐめず

たいへんげのたこ　仕こうこのりおちり

うこうんこちのたこ　むこうこひめぐりこうぐり

うこうとのぞやま　むこう大のべんぜず

出法　春八ヶ月　夏八ヶ月　秋八月　冬八ヶ月

梅　立春ヨリ四五十日目　桜　六十八日ヨリ　桃　七十五日目

彼岸　六十三日　櫻　十七日目　大井　日清水

花　七日　飛鳥山　ゴテン山　同　七日　大井　日ヒデヤ金

秋色　七十五日　汐　二月三日

八笑人遊行日

春

庚辰年ハ飛鳥山の花の雲
辛巳年ハ角田川のさくら花

夏

壬午年ハ高田の里の螢うつ
癸未年ハ両國川の涼あつ

秋

甲申年ハ百花園の秋七草
乙酉年ハ海晏寺の楓うつ

冬

丙戌年ハ青樓の夜の雪
丁亥年ハ浅草寺の年の市

右追々出版

花暦八笑人

江戸瀧亭鯉丈作

春の部　壹之巻

福壽草の咲初めしより、四季の花、盛たがへぬ時津風、靜けき御代の春なれや。遲日をおくる日暮里も、けふに飛鳥の人の山、茶瓶の行列三重も、壹升徳利のテンツヽも、彈けや謠への芝疊、浮世の塵の玉はゞき、はらふ片手はをりづめの、勝負あらそふ拳角力、幕の内外の合せもの、疎き親しきへだてなく、チョットおあひのお手もとも、はゞかりながら櫻哉、梢にむすぶ短尺も、思ひ〳〵の花見月、爰に下谷のかたほとり、何屋某が總領に、甚六ならで左次郎とて、生れついての呑太郎、年中續く夕部けに、うくる家業もうるさしと、弟右之助に相續させ、おのれは隱居の身となりて、心のまゝに不忍の、池のほとりに寓居、同氣もとむる呑會所。おもての方よりしわがれたる聲で、「チト御めん下りまし。あなたに安波太郎樣はお出なさりませんか」此家にいてつきの居候眼七、思「ハイ今も内から呼に來ましたが、まだこちらへは見えません」安波太郎は表を明けてずつとはいり、ヶバ「コウ〳〵内から誰が來

た」（あるじ左次郎）「ハ、、、べらぼうめェ、誰も來ヤアしねへ、返討をくらつたナ」（眼七傍より口を出す、）ガン「なんぢ等ごとき不才をもつて孔明を計ふとは、コレよく聞かッし、天へ向つてつばを吐けばかへつて我身へかゝる道理だ」ァバ「イヤごたいそうなことを申上げるハ。おれがあんまり聲を拵過ぎたからわるかつた」（といふ友達、また表のかたより卒八此家をのぞきながら、）卒「チイ安波公居るか〳〵、ちよつと來て見さつし、美女々々」ァバ「女か〳〵」（ト、うろたへてかけ出すひやうしに、くつぬぎの下駄をふみかへし、足をいため、顔をしかめながら障子をあけて、）「どれ〳〵」（卒八づつとはいつて上へあがり、）卒「あとを引寄せてくだつし」ァバ「女はどこへ來た」卒「あけて這入るが面倒だから、足下にちよつと木戸番を賴んだのよ。モウいゝから表をしめて此方へ來さつし」ァバ「このべらばァ」（ト、ぎくらはせる、）卒「コレよせェ〳〵。あんまりこすりつくな、木虱がたからァ」ァバ「チャなほ〳〵不屈なことを言上するナ」卒「ナンノ又その顔で、女ざんまいをするからのこつたァ」左次郎「それ見さつし、他を呪はど穴二ッといふは。最初おれをかつがうとして眼公にかつがれて、卒八先生にたてつけられるも、智惠のねへ理窟だハ、、、」ガン「ナニ安波公なんぞが呪ふには穴一ッで澤山だ。自分而已おちるばかりだ」ァバ「いめェましい、足をひどくぶつた、ァゝ痛へ〳〵」卒「イヤかつぐといへば昨日日暮里へ行きやした。ところが聞きねへ」ァバ「ナゼかつぐといへばひぐらしへ行くのだらう」卒「ナンノ又のたり出るヨ。燕雀なんぞ大鵬の心をしらん。此一回何等のことを

言出づるや、つぎの段に分説くるをまつて知れ」ァバ「こやつ何事をかいふ、ト首をかたぶけ手をこまぬき、やをら左右の耳をすまして、聞いた所が河童の屁だらう」卒「フン引かたことをならべ立てるは。コウそして、利多ふうにしやべるが、河童の屁といふはどういふわけか知りはしめへ。あんまり文盲で不便だから、友達のなさけに教へてつかはさう。マヅ河童といふやつは河にすむものだが、水の中で屁をひつたら、ぶく〳〵と音のするはずだぜ。ソレ柳樽に、

すかしても音のするのは河童の屁

といふ句があるは。それを亦たはいのない譬にいふわけがわかるめへ。これ則ちいひあやまつて居るからのことだ。子曰く、こつぱの火と論語にもあるは。夫でたはいのない筋がわかるだらう。ァヽ歎かはしいことだ、チツト學問をするがいゝ。一六の日には在宿いたすから、きけんを聞きながら來さつし」ァバ「ムヽ二七、三八、四九、五十、日濟貸で押分けられめェ。ァヽなる程屁の講釋は感心だ。おめへは博識ではねへ物ひりだらう」左次郎「コウ〳〵そりやァいゝが、卒公日ぐらしはどうしたのだ」ァバ「ナニ屁でまぎらしたから屁ぐらしだらう」左「どうも此奴が此通こしををるから噺ができねへ」卒「安波公チツトだまらッせへ。ァヽやかましい口だ」卒「イヤサ聞きねへ、奇妙な趣向で花見に來たが、皆一ぱいかつがれたのよ。さすがのおれせ

へ、まじめだと思つた」ァバ「ナニさすがのおれ、ヘン小刀のまがりが聞いて呆れらァ」左「東西東西、フウどういふ趣向だ」卒「聞きねへ、うまくすぢを書ァがつた」左「はてな」卒「聞きねへ。すつぱりとかつがれたぜ。寔ににくょしやァがつた、聞きねへ」左「フウはてな」卒「ャこてェられねへ」ァバ「ェ、こぢれつてェどうしたのだ。手前ばかりのみこんで、何だかわけがわからねへ」卒「いんにやョ聞きねへ」ァバ「聞いて居るョ。ひとつの咄に聞きねへ〳〵が百五六十出らァ、はやく申しあげろ」卒「そんならかいつまんで噺さう。まづ本舞臺三間の間いちめんに櫻の立木、上の方に葭簀ばりの茶見勢」「コレサつまんで咄すに其様なことはいらねへはな」卒「イヤサ聞きねへ。其出茶屋がすぢだはな。そこの娘が十七ばかりで岩井の半四郎、瀬川の菊之丞、げいは大吉粂三のおちやつぴいに、生姜二片入煎方つねのごとしといふ美女だらう。聞きねへ。その亦腰かけに居た野郎が二十才ばかりで、いづれ金滿の息子株、色のしろいいやみなしの梅幸、團十郎、持物衣裳つきは御推量ス」サン「モシ是には生姜はいりませんか」左「マタ〳〵ひかへろ〳〵」卒「ソコでその客が暫く休んで、茶代を置いて表へ出合がしら、でんぼうらしいやつが二人、門口で突當つたトいふがいひがかりで喧嘩よ。それから聞きねへ、其色男をノ聞きねへ、むごくぶちのめすもんだから、きょねへ」ァバ「イヤサ聞いてるョ」卒「あすこのことだから人は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com